

公開研究会「障害・クィア・シティズンシップ」

発題：障害とクィアの交差に着目する意義（星加良司）

■背景

- ・バリアフリー教育開発研究センターで取り組んでいるテーマの1つは、特定の人々を異常（abnormal）なものとして位置付けていく力。
- ・私は障害（ディスアビリティ）を対象にして研究を行ってきたが、最近クィア研究との接点に関心がある。

■理論的な意味づけ

- 「障害者」や「セクシャル・マイノリティ（LGBTQ）」は、否定形・残余としてのカテゴリー（第一項の否定としてしか内包を説明できないようなカテゴリー）
 - ＝正常（normal）な存在としての「健常者」や「異性愛者」からの逸脱
 - 異常性（abnormality）の付与
- また、ここで働いている規範（norm）は社会の基礎的な機能的必要と結びついているために非常に強力。
 - ・健全性規範→生産機能
 - ・異性愛規範→再生産機能
- 従来障害研究はジェンダー研究との親和性（「セックス/ジェンダー」と「インペアメント/ディスアビリティ」という概念セットの相似性）が指摘されてきたが、「女性」というカテゴリーはどちらかという第二項的
 - ＝「不完全な男」性（残余としての位置づけ）
 - +「女らしさ」→再生産する性、ケアする性（固有の性質の付与）

■歴史的な認識

- 特定の社会状況で、規範的＝正常（normal）であることを求める社会的な圧力が高まる
 - 社会の安定性・連続性・予測可能性の喪失から、社会のアイデンティティ探しへ（戦後の日本、EU統合後のヨーロッパ、9.11後のアメリカetc）
 - 規範の再構築、再立ち上げ
 - 異常とされる人々への同化圧力と排除の力学
- ↓
- ・そして現在の日本は？
- こうした状況認識の下、障害研究とクィア研究の理論、戦略、方法の相互参照を深めたい。
- その観点から、ディスアビリティとセクシュアリティの交差する領域で起こってきたこと、起こりつつあることについて、日本とアメリカの比較の視点を踏まえつつ考えてみたい。